慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	沖縄農村のイノベーション普及過程に関する諸命題
Sub Title	Generalizations Relating to the Diffusion Process of Innovations in Rural Villages of Okinawa
Author	宇野, 善康(Uno, Yoshiyasu) 長沢, 亮太(Nagasawa, Ryota) 公望, 聡史(Kubo, Satoshi) 石田, 米一(Ishida, Yonekazu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1978
Jtitle	哲學 No.68 (1978. 10) ,p.81- 103
JaLC DOI	
Abstract	For a three week period from July 1, 1976, a field research was conducted in three rural villages (Takara, Ishikawa, and Oku) of the Okinawa main island to ascertain the conditions of diffusion of various innovations. The subjects emphasized in this report are the followings : Subject 1 : The speed of diffusion of innovations. Subject 2: Factors peculiar to Japan conducive for diffusion. Subject 3: Relativity of standard of measurement predicting innovation. Subject 4 : Expansion of marital mobility and stability of those brides being married in. Subject 5 : Interaction of two value perceptions relating to the holding of Ocean Exposition 1975. For each of the above subjects, the following generalizations will be presented. Generalization 1: The commencement of innovation adoption is earlier in villages near a city than in remote villages, Generalization 2 : In a situation where a child raised in povorty leaves the village and acquires an income outside of the village, the parent-child bond becomes a factor for diffusion of a particular innovation in the village. Generalization 3: For prediction of innovation, some absolute standard cannot be used for its measurement but a relative stdndard should be used. Generalization 4: Women of marrying age do not desire to remain in their village but prefer to find a mate outside the village. In remote villages undergoing population out-migration, there is almost no case of bride coming in; in villages near a city, the location of nativity of the incoming bride is on an expanding trend, but as an innovation them- selves, the brides, inspite of the village solidarity favoring exclusionism, are managing to gain stability. Generalization 5: When a forced innovation as the Ocean Exposition 75, the justification of which rests in the fact of it being an important governmental project, is established with the villagers having have to sacrifice their traditional way of life, interaction between the concept favoring exchange of values on the part of those promoting the project and that emphasizing villagers' notion of "lye" as derived from their view of traditional values on the part of those having to cooperate can be seen.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000068-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

沖縄農村のイノベーション普及過程に関する諸命題

宇野善康　長沢亮太
公望聡史　石田米一

Generalizations Relating to the Diffusion Process of Innovations in Rural Villages of Okinawa

Yoshiyasu Uno　*Ryota Nagasawa*
Satoshi Kubo　*Yonekazu Ishida*

For a three week period from July 1, 1976, a field research was conducted in three rural villages (Takara, Ishikawa, and Oku) of the Okinawa main island to ascertain the conditions of diffusion of various innovations. The subjects emphasized in this report are the followings:

Subject 1: The speed of diffusion of innovations.
Subject 2: Factors peculiar to Japan conducive for diffusion.
Subject 3: Relativity of standard of measurement predicting innovation.
Subject 4: Expansion of marital mobility and stability of those brides being married in.
Subject 5: Interaction of two value perceptions relating to the holding of Ocean Exposition 1975.

Y. UNO　慶応義塾大学文学部教授（社会心理学）
R. NAGASAWA　建設省建設大学校中央訓練所所長（社会学）
S. KUBO　慶応義塾大学社会学研究科博士課程（社会心理学）
Y. ISHIDA　〃　修士課程（社会心理学）

For each of the above subjects, the following generalizations will be presented.

Generalization 1: The commencement of innovation adoption is earlier in villages near a city than in remote villages,

[redacted]

Generalization 2: In a situation where a child raised in povorty leaves the village and acquires an income outside of the village, the parent-child bond becomes a factor for diffusion of a particular innovation in the village.

Generalization 3: For prediction of innovation, some absolute standard cannot be used for its measurement but a relative stdndard should be used.

Generalization 4: Women of marrying age do not desire to remain in their village but prefer to find a mate outside the village. In remote villages undergoing population out-migration, there is almost no case of bride coming in; in villages near a city, the location of nativity of the incoming bride is on an expanding trend, but as an innovation themselves, the brides, inspite of the village solidarity favoring exclusionism, are managing to gain stability.

Generalization 5: When a forced innovation as the Ocean Exposition 75, the justification of which rests in the fact of it being an important governmental project, is established with the villagers having have to sacrifice their traditional way of life, interaction between the concept favoring exchange of values on the part of those promoting the project and that emphasizing villagers' notion of "Iye" as derived from their view of traditional values on the part of those having to cooperate can be seen.

序

比嘉春潮，霜田正次，新里恵二著の「沖縄」には，つぎのように書かれている．

「1954年（昭和29年）に，社会党の訪ソ使節団が，帰途，沖縄に立ちよ

ったとき，使節団団長が，『沖縄には日本語の新聞があるか』と質問して，沖縄の新聞記者たちを呆れさせた.」

また，総理大臣であった芦田均さんが，沖縄の祖国復帰運動のたかまりに対して，『沖縄の土人は戦前はヤシの実を食べ，ハダシで歩いていたが，今ではアメリカのお陰で，いい生活をしているではないか』と放言して，沖縄県民を大変怒らせたことがあった.[1]」

しかしながら，1965年(昭和40年) 8月に戦後はじめて現役の総理大臣として沖縄を訪れた佐藤栄作首相は，「沖縄の祖国復帰が実現しない限り，わが国にとって戦後の終っていないことをよく承知しております」と述べている.[2]

1969年（昭和44年）6月には，「沖縄ノート」の中で，大江健三郎は，「核時代の今日を生きる犠牲と差別の総量において，まことに沖縄は日本全体をかこいこんだにひとしく，しかもなお，それをこえて尨大な重荷を支えている……今日の日本の実体は，沖縄の存在のかげにかくれて，ひそかに沖縄に属することによってのみ，いま，かくのごとくにせの自立を示しているのだと透視されるであらう……日本は沖縄に属する」と書いた.[3]

1972年（昭和47年）には，評論家・草柳大蔵が，「沖縄の信長，具志堅宗精」という文章の中で，「明治が見たければ，ハワイにゆけ」という言葉があるが，「日本人に会いたければ，具志堅宗精に会え」といわざるを得ない，と述べている.[4]

さて，筆者の中の一人は，建設省の建設大学校中央訓練所所長とともに，沖縄のダム建設や道路建設，海洋博覧会会場の造成に従事している訓練所卒業生のための実践移動大学の講師として，1975年（昭和50年）6月13日(金)，空路，羽田より那覇に着き，沖縄と初対面した．一週間，各地を廻って得た沖縄の第一印象は，つぎのようであった.

1. 景観——常夏の国ハワイの印象と全く似ていた．太陽の異常な輝きと繁茂した鮮明な景色が本土とは大変に違っていた．

2. 食物——肉が多い．野菜（ヤサイ）と呼ばれる副食物には，こってりと肉が入っている．調査の学生は沖縄の食べ物をギンギラ・ギラギラと表現した．沖縄ソバには豚足の入っているものもあり，ソーキそばは骨つき肉入りのそばである．山羊のサシミ，ヒージャーのフグリのサシミまである．

3. 建物——最近，普及し始めた鉄筋の建物以外は，すべて一階建てで，屋根瓦は漆喰いで固めてあり，台風を防ぐために建てられている．

4. 言葉——沖縄の人同志が話している沖縄語は，古代日本語であると聞いたことがあるが，筆者には皆目判らず（もっとも新潟県の僻地村で聞いた早口の新潟弁も半分位しか聞きとれなかったが），国頭村で聞いた沖縄会話のアクセントは中国語に似ているところがあった．

5. 人——本土では余り見かけない種類の目立った美人をときどきみかけた．フィリピン人との混血であるということであった．

以上の諸印象は，つぎのような考察に導く．

生活環境が亜熱帯地域にあるということは，温帯地域の人間と比べて，行動の仕方や行動のテンポが相違するに違いないこと．肉食が多いということは，菜食の多い人間に比べて考え方，感じ方に微妙な差がでてくるに違いないこと．建物は台風を防ぐことに主力が注がれ，快適な屋内生活を享受する面が犠牲になっていること．本土の人間には理解できない言語群を持っているということは，その人たち丈の世界が形成され，その人たちの間だけの連帯感が育まれてきた可能性のあること．混血の傾向に特異性があるということは，沖縄の人たちの行動圏，生活圏が本土の人たちと違っていることを示唆している．

沖縄の本土復帰（1972年）が近づくにつれて本土の文筆家や政治家は，沖縄の人びとに対して，同朋としての共通運命，共通点を強調してきた．

しかし，同じ同朋であるけれども，沖縄の人たちは，本土の人間とはやや違った行動環境や境遇に置かれていること――したがって，行動観察や調査結果の解釈に際しては，本土中央部の判断基準を用いることは，つねに必ずしも妥当でないことを意識しなくてはならないと思われた．

I. 定　義　と　方　法

（1） 定義――ここで用いる「イノベーション」とは，特定地域社会またわ，一つの文化圏にとって，いままで存在しなかった新しい思想や信仰，新制度や新方式，新技術や新製品，新しい行動様式など，一般に新しい文化要素にみられる新しいアイデアのことである．これらのアイデアは，「情報の形」，「物の形」，「行動の型」となって伝播していくものである．

本稿で取り上げる仮説命題中の諸対象は，調査時点においては，被調査地の沖縄農村にとって，すべてイノベーションとしての意味をもつものである．

（2） 方法上の問題点――われわれの調査に関しては，つぎの諸項目が問題となる．

＜A＞　社会変容の捉え方の問題
＜B＞　学際的研究における各領域の統合の仕方の問題
＜C＞　調査地の選定の問題
＜D＞　調査における観測装置としての調査者の問題

＜A＞については，別のところで発表した．[5]
＜B＞については，説明を割愛する．
＜C＞については，調査目的によって選定の基準が異るわけであるが，

比較に耐えうる代表性を備えた地域を選定することが好ましい．しかし，今回は，沖縄的な顕著な問題をかかえている地域社会を選び，ケース研究の形をとることにした．

＜D＞については久しい以前に論じたが[6]，今回は序文や以下の文中で折に触れて述べることとする．

（3） 調査対象の層的設定――沖縄農村の変容の調査を計画するに当って，三層的水準を設定した．すなわち，1．沖縄農村全体の変容，2．特色のある農村の各々の変容，3．類型化し得る典型的な農家の変容．

この報告では，「2．特色のある農村の 各々の変容」に着目する．今回は，類型化された上での典型的な農村ではなく，前述したようにケース研究として三地区（農村）が取り上げられた．

（4） 調査地区――選定した三地区は，つぎのごとくであった．

1． 東風平村（こちんだそん）・高良（たから）区――那覇市に近い都市近郊村であって，農業近代化がいくらかみられ，兼業農家が多く，生活内容にも都市化の影響が多くみられる地区．

2． 本部町（もとぶちょう）・石川（いしかわ）区――沖縄海洋博の会場となった地区で，会場用地買収のため農地・宅地が買いあげられ，農家数が半械し，甚大な影響を受けた地区で，屋取（やーどぃ）部落である．

3． 国頭村（くにがみそん）・奥（おく）区――沖縄本島の最北端にある孤立的な僻地村で，もっとも沖縄的伝統を残しているといわれている山原（やんばる）型の地区である．

（5） 調査期間――数回に亘る調査依頼や予備調査ののち，1976年（昭和51年）7月1日から三週間に亘っておこなわれた．

（6） 調査員と手段――慶応義塾大学の宇野研究会の3年生2名と4年

生12名，大学院生１名，および琉球大学の４年生６名が上記三地区の農家に対して，各戸３時間から４時間面接して綿密な記録をとると同時に質問紙調査を併用した．慶応義塾の学生に対しては，調査の１年前より，沖縄調査のために専門的な特訓がおこなわれた．今回の調査は沖縄農村に対する母集団調査ではなく，ケース研究であるから，調査地区の事情をできる丈深く体験し，掘り下げることに主眼が置かれた．この報告はしたがって，ケース研究の結果から母集団に対する仮説的命題を提出するという形をとる．

II. 仮説的諸命題

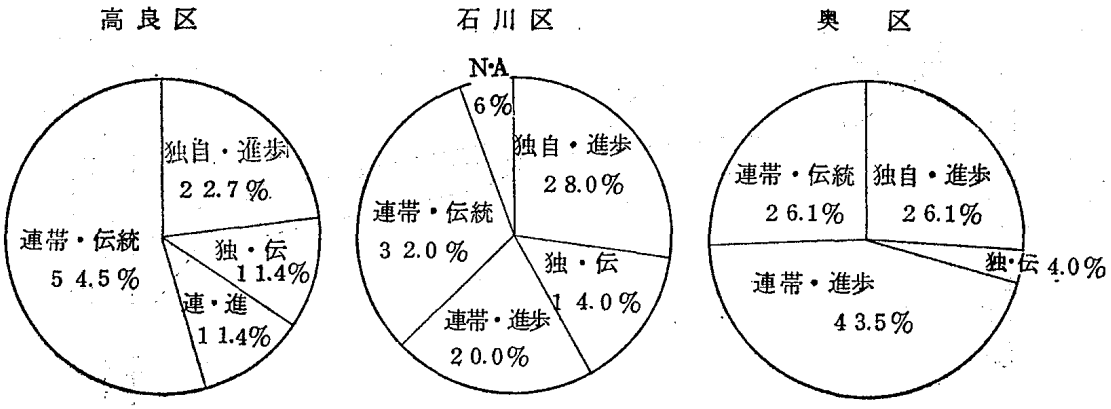
（1） イノベーション普及速度について

第１図〔価値態度の４類型[7]の地区別分布図〕をみると，進歩的であって連帯的な人の比率は，

奥区　43.5%，　石川区　20.0%，　高良区　11.4%，

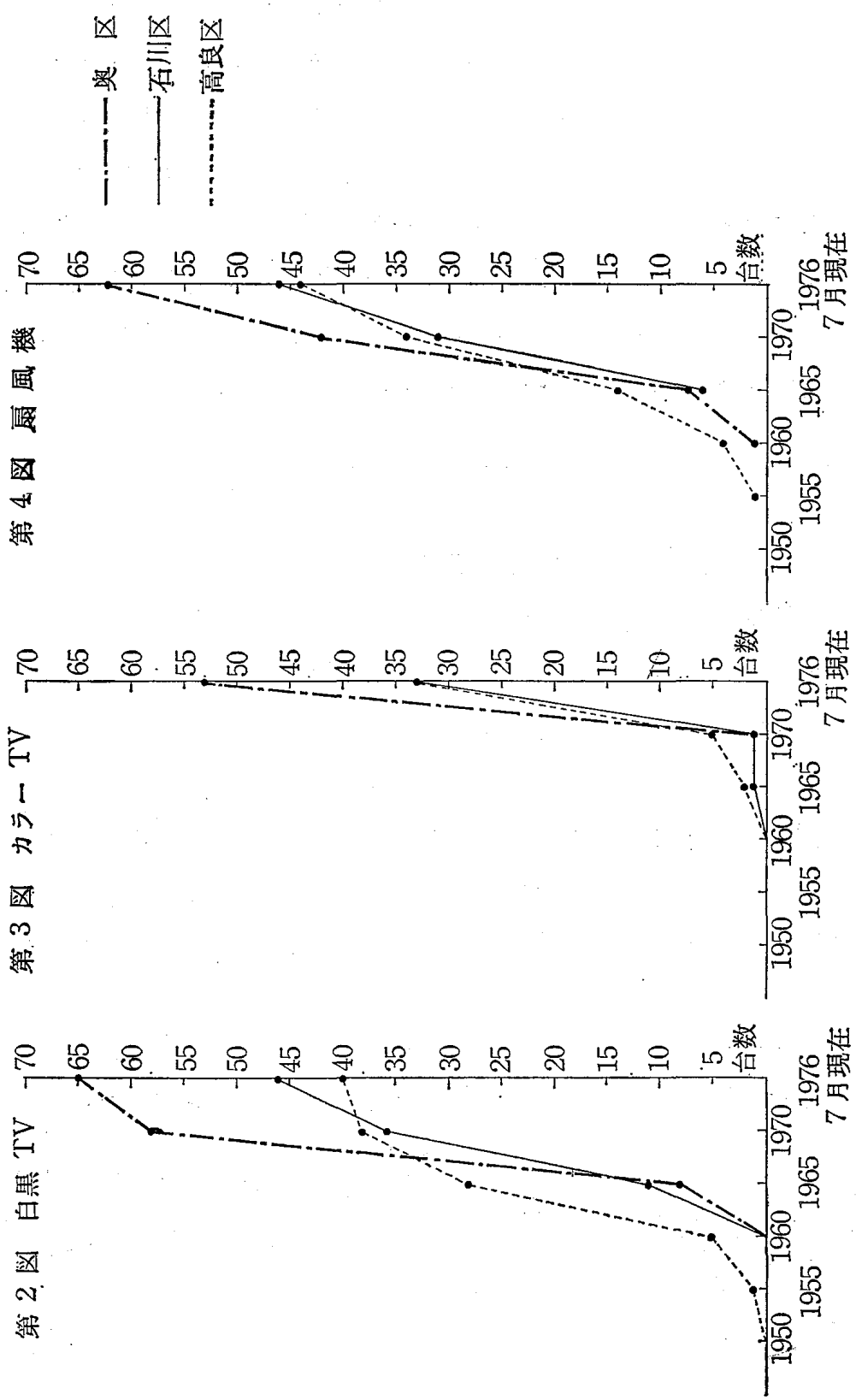
となっている．

つぎに，第２図　白黒ＴＶ，第３図カラーＴＶ，第４図　扇風機，第５図　電気コタツ，第６図　電気冷蔵庫，第７図　農用トラック　の各図におけるイノベーション普及曲線をみると，きわめて顕著な一定の傾向をみ

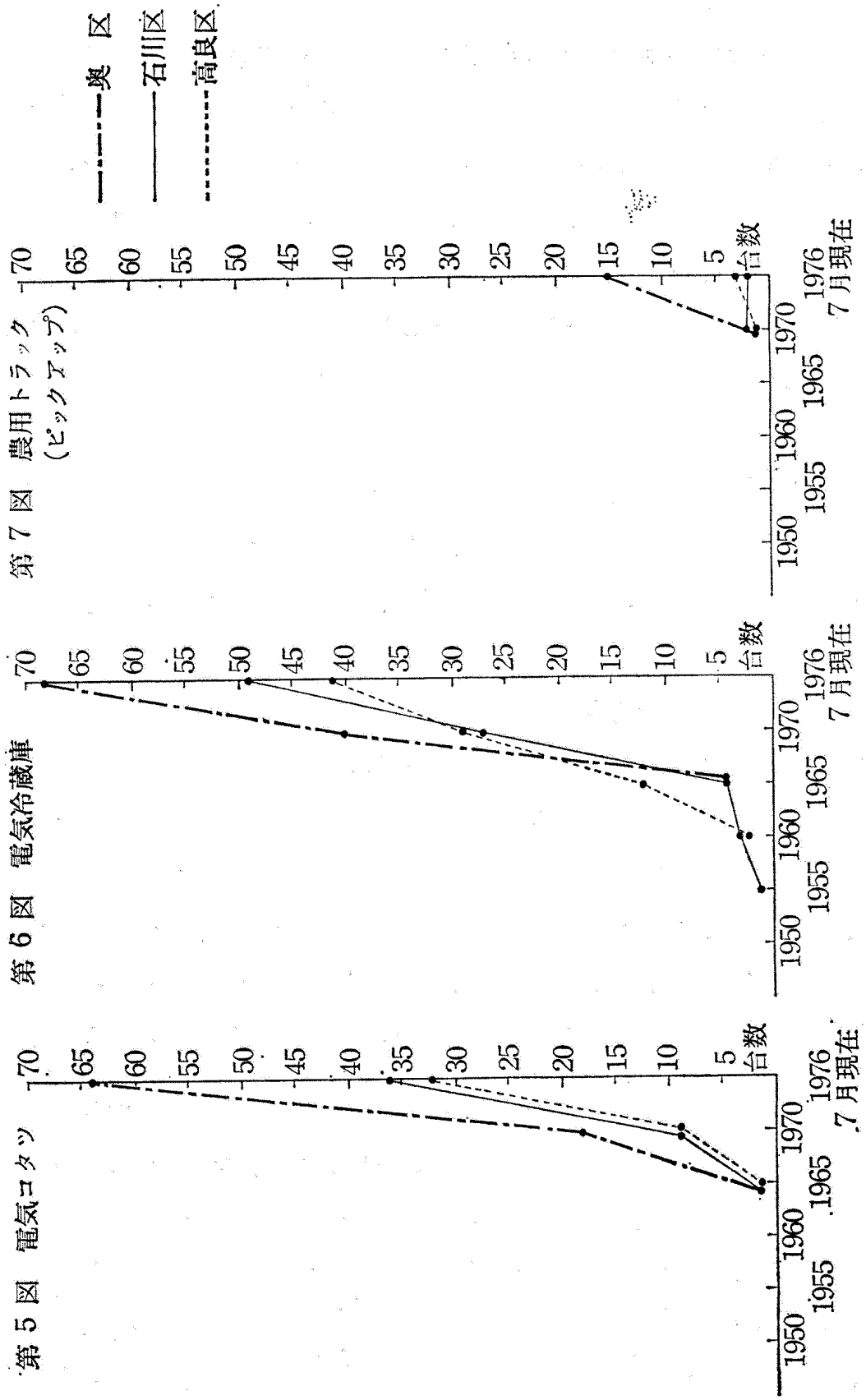


第１図　価値態度・４類型の地区別分布図

沖縄農村（高良区，石川区，奥区）におけるイノベーション普及曲線（5年間隔累積）



沖縄農村（高良区，石川区，奥区）におけるイノベーション普及曲線（5年間隔累積）



ることができる．

沖縄文明の中心地である那覇市からもっとも遠い僻地村の奥区は，進歩的で連帯性のある人たちの比率がもっとも高い．この地区におけるイノベーション採用の開始時期は，高良区に比べて遅れている[redacted]．これに対して，那覇市にもっとも近い所にある高良区は，進歩的で連帯性のある人たちの比率がもっとも低い地区である．高良区は都市に近いため，イノベーション採用の開始は奥区に比べて早い[redacted]．

仮説的命題〔1〕 イノベーション採用の開始時期は，都市近郊村において早く，僻地村において遅い[redacted]

（2） 特殊日本的普及促進要因について

第1表〔子供が買ってくれた耐久消費財〕をみると，石川区に普及したイノベーションのうち，白黒TVの1/4，カラーTVの1/5，扇風機の1/4，電気コタツと冷蔵庫それぞれの2/5を子供が親に買って贈ったものであることがわかる．奥においても，カラーTVの3割，扇風機，電気コタツ，冷蔵庫の1割以上を子供が買って，親に贈っている．高良区においても，白黒TV，カラーTV，扇風機，冷蔵庫の1割前後を子供が買って親に贈

第1表 子供（血縁者を含む）が買ってくれた耐久消費財

	TV	カラーTV	扇風機	電気こたつ	冷蔵庫
高良	14.6%	14.3%	11.4%	28.9%	9.3%
石川	**23.9**	20.6	**24.5**	**37.9**	**36.0**
奥	1.5	**29.1**	11.9	12.3	13.2
TOL	11.8	22.6	15.6	23.6	19.3

数字は普及総数中の%

第2表　各世帯別の収入（農業収入＋非農業収入）の分布表

	万円 0〜7	万円 7〜30	万円 30〜70	万円 70〜100	万円 100〜150	万円 150〜200	万円 200〜300	万円 300〜500	万円 500〜700	万円 700以上	無収入	NA	TOL
高良	0人	1人	8人	4人	8人	4人	**12**人	4人	1人	0人	0人	2人	44人
石川	7	7	3	**9**人	5	5	2	3	0	0	2	7	50
奥	5	2	**16**	7人	8	7	13	3	2	0	1	5	69
TOL	12	10	27	20	21	16	27	10	3	0	3	14	163

っているが，電気コタツについては，3割近くが親に贈られている．

日本においても都会では，子供がたとえ親に上記のような耐久消費財を贈ろうとしても，親たちはすでにそれらを所持しているので，都会ではみられない現象である．子供たちは他出して職業に就いたとき，ボーナスなどの一時収入によって，これらを親に贈っている．

第2表〔各世帯別の収入の分布表〕をみると，石川，奥，高良の各地区出身の青年たちがそうせざるを得ない事情の一面を察することができるが，この現象は，各世帯の収入が低いことのみで説明できるものではなく，報恩や親孝行の概念によらなければ説明のできないものである．たとえ，青年が他出して独立の生計を営んだとしても，かれは依然として家族の一員であり，親の生活状態を無視して，ひとり現代文明を享受するには忍びない心情を読みとらざるを得ないのである．

仮説的命題〔2〕 貧困の生活の中から子供が他出して職業収入を得るようになった場合，親子の血縁的紐帯は，特定イノベーションの普及促進要因となる．

（3） 普及を予測する判断基準の相対性について

第5図〔電気コタツの普及曲線〕をみると，三地区において，普及の開

始時期が同一であり，普及開始と同時に異常な早さで普及が進んだことが明瞭である．

第3表　三地区（高良，石川，奥）におけるイノベーション普及率

	高　良	石　川	奥
インスタントラーメン	84.1%	74.0%	65.2%
冷凍食品	70.5	58.0	68.1
住居新築（10年以内）	31.8	36.0	15.9
増改築（10年以内）	45.5	48.0	65.2
鉄筋の家	25.0	16.0	1.4
ラジオ	88.6	86.0	68.1
テレビ	**93.2**	**92.0**	**94.2**
カラーテレビ	79.5	68.0	79.7
カセット	54.5	18.0	27.5
ステレオ	54.5	20.0	30.4
オートバイ	18.2	16.0	14.5
乗用車	79.5	16.0	13.0
アイロン	93.2	74.0	81.2
扇風機	54.5	49.9	40.3
電気コタツ	**86.4**	**74.0**	**94.2**
電気掃除機	59.1	40.0	11.6
電気洗濯機	93.2	80.0	91.3
冷蔵庫	**97.7**	**100.0**	**98.6**
電子レンジ	13.6	6.0	10.1
ガスコンロ	**59.5**	**90.0**	**100.0**
ガス風呂	56.8	52.0	50.0
手押耕運機	45.5	46.0	29.0
農用トラクター	47.7	16.0	8.7
動力噴霧機	2.3	18.0	28.0
動力散粉機	2.3	4.0	10.8
さとうきび刈取機	2.3	0	1.4
動力脱葉機	0	2.0	0
動力搬出機	4.5	0	0
動力脱穀機	0	2.0	4.3
農用トラック	6.8	10.0	26.0
食事用椅子	31.8	26.0	36.2

第3表〔イノベーション普及率〕をみると，電気コタツの普及率は，第1位　冷蔵庫，第2位　ガスコンロ，第3位　白黒TV　に次いで第4位の普及率を示している．

高良区で 86.4%，石川区で 74.0%，奥区ではなんと 94.2% の普及率を示している．

関東地方で放映されるNHK-TVの天気予報の時間には，しばしば，「沖縄を除いて全国各地は，気温が一率に氷点下になった」とか，「何度以下になった」などと，沖縄の気温はいつも別格に扱われていることが多い．

沖縄は冬でも，せいぜい寒くて14～15°C位までしか下がらない地方で，もっとも寒い歴史上の記録でも，明け方に10°Cになったことがあるそうであるが，そうゆう温い地方に，なぜ電気コタツがこんなに普及したか．本土の人間からみると，まことに不思議にしか思えない現象である．

本土の人たちが，転勤などで沖縄に住みはじめると，最初の2年間位は，冬期間も暖房を必要としないけれども，3年目位から暖房が欲しくなってくるそうである．

暖い気温に適応している者にとっては，温度が少し下がっただけでも，寒く感ずるが，寒い気温に適応している者にとっては，前者の場合よりも低い温度まで気温が上がれば，温く感ずることから「適応水準」の概念を導入することによって上記の事情の一面は理解できることになる．

沖縄に電気コタツが普及した原因はいろいろ考えられる．

① TVのホームドラマの家族団らんの場面には電気コタツがよく出てくるそうで，したがって，電気コタツは沖縄のTV視聴者に対して好ましいイメージを与え続けてきたこと．

② 机や飯台にも兼用でき多目的使用に耐える性質をもっていて，使用手続きが簡便であること．

③ 子供が親に贈る品物として，その機能や価格が手頃であること．

④　今までは寒さに対して，小箱（火鉢のこと）などで我慢していた人も，経済的余裕ができると共に我慢しなくなったこと．

⑤　暖房に石油ストーブを使っていた人にとって，電気コタツは，種々の点で便利で安全であること．などを指摘することができる．

しかし，これらは，寒い地方にも適用できることであるから，亜熱帯地方の電気コタツ普及に関して，つぎのような命題をとり上げておきたい．

仮説的命題〔3〕 イノベーションの普及の予測は，ある絶体的な基準によって計られるのではなく，相対的基準によって計られるものである．

（4） 婚入者出身地圏の拡大と婚入者の定着について

第4表〔婚入者の出身地圏の拡大〕をみると，高良区在住の既婚女性の中，70才代，60才代，50才代の女性には，沖縄県外から婚入してきた者は1人もなく，同じ高良区に育った者がもっとも多数を占めている．これらの大部分は，戦前および戦時中に結婚した人たちである．40才代になると，県外から婚入してきた女性は1人もいないが，50才代以上の人たちとは違って，高良区より広い範囲の東風平村から婚入してきた人たちが多数

第4表　婚入者の出身地圏の拡大（高良区における既婚女性総数65名）

年齢	人数		所在地別人数（パーセント）							
			高良区		東風平村		沖縄県		県外	
歳代	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
20	8	(100)	0	(0)	0	(0)	6	**(75.0)**	2	**(25.0)**
30	12	(100)	1	(8.3)	2	(16.6)	9	**(75.0)**	0	(0)
40	10	(100)	2	(20.0)	6	**(60.0)**	2	(20.0)	0	(0)
50	13	(100)	7	**(53.8)**	3	(23.1)	3	(23.1)	0	(0)
60	13	(100)	5	**(38.5)**	4	(30.8)	4	(30.8)	0	(0)
70	9	(100)	4	**(44.5)**	3	(33.3)	2	(22.2)	0	(0)
計	人 65		人 19		人 18		人 25		人 2	

を占める．さらに若い世代の30才代の女性では，県外からの婚入者はやはり1人もいないが，高良区や東風平村よりも，さらに広い範囲の沖縄県内からの婚入者がもっとも多数を占める．そして，20才代の女性になると，地元の高良区育ちや東風平村出身者が皆無となり，その地域よりも外部の沖縄県からの婚入者がもっとも多数を占め，さらに県外からの婚入者も現れている．

このことは，年とともに婚入者の出身地圏の拡大が生じているのみならず，地元育ちの女性は，地元の青年と結婚せずに，他地域へ婚出してしまったことを物語っている．この現象が各地で証明されるとすれば，現代の沖縄の若い女性における他地域指向的大移動を証明することになる．

第5表　奥区の人口の推移

1948 年	(昭和 23 年	1,268 名
1957 年	(〃 32 年	931 名
1971 年	(〃 46 年	536 名
1975 年	(〃 50 年	385 名

奥区（僻地村）においても，適令期の女性はすべて他出しており，奥区は第5表〔奥区の人口の推移〕にみられるような過疎化の進行とともに老人の村，枯れていく村の印象を与える面がある．若い女性がすべて他出していくことに対して，郷土愛に燃える少数の青年たちが村の振興のために鋭意努力している．

1976年（昭和51年）6月当時，奥区の青年は5名のみで，青年会長の上原耕造君（25才，三男）は，お茶の栽培法を静岡県で勉強し，郷里の奥区に帰って他の人々とともに精励し，この年，奥区が朝日農業賞を受けるところまで敢闘した．青年会副会長の宮城正憲君（26才，三男）は，大阪などへの他出の後，帰郷し父親の支援を得て，100頭に及ぶ養豚に成功し，成果を挙げつつあった．他の2名は道路工事に従事していたが，以上の4名は，いずれも独身であり嫁探しのため深刻な立場におかれていた．地元

育ちの適令の女性はすべて他出しており，その上，他地域からの婚入者が得難い状態にあった．

しかし，高良区（都市近郊村）の場合のように，年々，婚入者の出身地圏が拡大していく地区においても，地元文化とは違った文化を身につけた婚入者は，一種のイノベーションであって，カルチュア・ショックと異文化的抵抗を乗り超えて，婚入者の定着が進んでいるのである．

野原登吉氏の妻・洋子さん（那覇市首里出身）は市(まち)育ちのため農業の事情に疎かった．姑さんからサトウキビを刈る鎌を買ってくるように云われたとき，灌木に似たキビは鋸で引いて収穫するものと考えたため，村人の社交の場である雑貨店へ鋸を買いに行ったので「キビ引きの洋子」と村中の噂になった．村には刺激がなく話題がないため，鬼の首でも取ったように噂が拡がった．これは村のもつ伝統的な地元文化の排他的凝集力によるものである．洋子さんの家が都会風の食品雑貨店を開くと，これが，排他的凝集力に対抗する核となり，新しい婚入者たちの集会所となり，定着の港の役割を演ずるようになった．

仮説的命題〔4〕 村における適令期の女性は，地元に定着することを好まず，他出する傾向が強く，過疎化の進んでいる僻地村への嫁の婚入者は皆無に等しい．これに対して，都市近郊村における婚入者の出身地圏は拡大しつつあり，かつ，イノベーションとしての婚入者は，農村のもつ排他的凝集力に抗して定着しつつある．

（5） 海洋博覧会開催における二つの価値観の相克について

第6表〔沖縄県本部町字石川における土地所有権移動と地目別内訳〕にみられるように，沖縄海洋博開催のために石川区の総面積の約1/2の土地が買い占められ，その中の1/2が海洋博会場の用地となり，買占められた面積の約1/2が畑であった．

第6表　沖縄県国頭郡本部町字石川に[illegible]
と地目別内訳

字石川の総面積	買占め総面積	海洋博会場用地
8334 アール	3794 アール	177 アール

買占め面積の地目別内訳	畑	山　林	宅　地
	1891 アール	1685 アール	211 アール

第7表　経営耕地規模別農家数（石川区）の推移

	総農家数	アール 5～10	アール 10～30	アール 30～50	アール 50～70	アール 70～100	アール 100～150	アール 150～200	アール 200以上
	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	
'64 年センサス	77	1	17	24	22	16	3	1	—
'71 年センサス	67	3	9	17	26	7	4	1	—
'74 年調査	43	2	16	8	9	6	2	—	—
'75 年センサス	36	1	12	15	7	1	—	—	—

1964年センサスは1964年4月1日現在
1971年センサスは1971年10月1日現在
1974年調査は1974年2月1日現在（沖縄国際大学助教授来間泰男氏等の調査）
1975年センサスは1974年12月1日現在

第7表〔経営耕地規模別農家数（石川区）の推移〕にみられるように，本土復帰直前の1971年から海洋博開催の1975年までの4年間に字石川区の農家数は半械し，かつ経営耕地規模が著しく零細化した．

第8表〔専兼別農家数（石川区）の推移〕をみると，農業が片手間に行われるようになったことが分り，第9表〔自小作別農家数（石川区）の推移〕から自小作農家が激減し，小自作農家と小作農家が農業をすてて転業したことを知るのである．

第10表〔農業指向（子供にも農業を継がせたい——農業以外に就職させ

第8表　専兼別農家数（石川区）の推移

	総農家数	専業農家	兼業農家	第一種兼業			第二種兼業			うち老人世帯		
				世帯主が兼業	世帯主以外が兼業	小計	世帯主が兼業	世帯主以外が兼業	小計	専業農業	第一種兼業	第二種兼業
	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸	戸
'64 年センサス	77	54	23			13			10			
'71 年センサス	67	39	28	2	16	18	9	1	10	1	1	—
'74 年調査	43	21	23	2	3	5	14	1	18	3	—	1
'75 年調査	38	14	24	1	1	2	19	3	22			
'75 年センサス	36	17	19	2	1	3	12	4	16			

第9表　自小作別農家数（石川区）の推移

	総農家数	自作	自小作	小自作	小作
	戸	戸	戸	戸	戸
'76 年センサス	67	27	24	18	3
'74 年調査	43	31	4	8	—
'75 年センサス	36	28	8	—	—

たい)〕および第11表〔農業指向（農業ももうかる——農業ではもうかる可能性は少ない)〕をみると，他の2地区（高良区，奥区）に比べて，「子供には農業を継がせたくない」，「農業ではもうかる可能性は少い」と考える世帯主の多いことがみられる．海洋博終了後，農業はばかばかしいからと大工手伝いになった人もあり，また以前は耕運機所有者に畑を耕してもらっていたが，海洋博によって賃金が高くなったため中止せざるを得なくなった人もいる．

第10表　農業指向
(子供にも農業を継がせたい—農業以外に就職させたい)

区	農業を継がせたい	農業以外	N. A	計
高良	19 (43.2%)	25 (56.8%)	0	44 (100.0%)
石川	15 (30.0%)	34 (68.0%)	1 (2.0%)	50 (100.0%)
奥	25 (36.2%)	43 (62.3%)	1 (1.5%)	69 (100.0%)

第11表　農業指向(農業ももうかる—農業でもうかる可能性は少い)

区	農業ももうかる	もうかる可能性は少ない	N. A	計
	人	人	人	人
高良	23 (52.3%)	21 (47.7%)	0	44 (100%)
石川	13 (26.0%)	34 (68.0%)	3 (6.0%)	50 (100%)
奥	24 (34.8%)	43 (62.3%)	2 (2.9%)	69 (100%)

このように，石川区においては，海洋博開催のインパクトが物理的にも精神的にも区民に対して大きな影響を与えた．

面接者の報告によると，「海洋博会場の土地提供者には，海洋博終了後，職業をあっせんすると政府が約束したが，何もしてくれない，裏切られた」とか「政府に土地をとられてしまった」と嘆き，政府に対する不信感を洩らした人がかなりあったようである．

しかし，これらの人々の中には，土地買却金で耐久消費財を買い揃えたり，鉄筋の家を建てたり，多額の貯金を所有できた人も含まれているという．

第12表〔日本政府の 3.3 m² 当りの買上げ価格と(時価)(石川区)」にみ

第12表　日本政府の 3.3 m² 当りの買上げ価格と(時価)(石川区)

宅地	7,000 円	(時価約 1,000 円)
農地	5,700 円	(〃 約 300 円)
原野	4,200 円	(〃 約 70 円)

但し，時価は土地のインフォーマントによる評価価額

られるように，政府は，時価約1,000円の宅地をその7倍の7,000円で，時価約300円の農地をその約20倍の5,700円で，また時価約70円の原野を4,200円で買収した（この原野には海岸や墓地を含む）のであるから，不満はない筈であると考え勝ちである．これはなぜか，決して石川区民が非常識で，がめつく，ずうずうしいのではない．海洋博覧会場の土地買収を進める上で，区民に対して過大な経済的社会的期待を懐かせた推進者による一種の仲人口（なかうどぐち）のためである一面もあるが，心底の理由はつぎの点にかかっているように思われる．

交換価値という観点にたって物や心を計量する論理と先祖伝来の歴史的愛着のある土地の永続的利用価値（先祖代々の職場）という歴史的価値の観点に立つ農民的イエの論理との相克によるのである．

交換価値の論理からすれば，売却した土地がその後，値上りすればしまったと思い，値下りすれば，売っておいてよかったと感ずるわけであるが，農民的イエの論理からすれば，土地の値上り，値下りは関係のないことで，農民にとって農地とは，土地ではなく職場なのである．しかし，それではなぜ，土地を売ったかというと，その理由は，本土復帰運動の推進者，自覚に基づくその協力者，協力させられた人の三者において異っている．協力させられた人の理由は，ムラの連帯性，凝集性に従ったのであって土地収入は附随的，副産物であったことに着目しなければならない．

仲人口が種々の点で裏目に出た現在[8]，表面的にいうと，海洋博会場跡(現在は公園)は風光明眉な素適な公園であるけれども，裏面的にみると，協力させられた人にとっては，ウラミの公園となっている．そこで以上をまとめて，つぎのような命題を提出する．

仮説的命題〔5〕 国家的事業（海洋博覧会）という錦の御旗を掲げ，大きな圧力をもったイノベーションが，村民の歴史的生活基盤の犠牲において成立する場合には，推進者側における交換価値の論理と，協力させられた側における歴史的価値の観点に立つ農民的イエの論理との相克が生ずる．

III. 要　約

本報告で提出した仮説的諸命題を列挙するとつぎのようになる.

仮説的命題〔1〕 イノベーション採用の開始時期は，都市近郊村において早く，僻地村において遅い[redacted]

仮説的命題〔2〕 貧困の生活の中から子供が他出して職業収入を得るようになった場合，親子の血縁的紐帯は，特定イノベーションの普及促進要因となる.

仮説的命題〔3〕 イノベーションの普及の予測は，ある絶体的な基準によって計られるのではなく，相対的基準によって計られるものである.

仮説的命題〔4〕 村における適令期の女性は，地元に定着することを好まず，他出する傾向が強く，過疎化の進んでいる僻地村への嫁の婚入者は皆無に等しい．これに対して，都市近郊村における婚入者の出身地は拡大しつつあり，かつ，イノベーションとしての婚入者は，農村のもつ排他的凝集力に抗して定着しつつある.

仮説的命題〔5〕国家的事業（海洋博覧会）という錦の御旗を掲げ，大きな圧力をもったイノベーションが，村民の歴史的生活基盤の犠牲において成立する場合には，推進者側における交換価値の論理と，協力させられた側における歴史的価値の観点に立つ農民的イエの論理との相克が生ずる.

註

（1） 比嘉春潮，霜田正次，新里恵二著「沖縄」岩波新書 1963年 p. 3

（2） 中野好夫，新崎盛暉著「沖縄戦後史」岩波新書 1976年 p. 148

（3） 大江健三郎著「沖縄ノート」岩波新書 1970年 p. 33

（4） 草柳大蔵著「沖縄の信長，具志堅宗精」文芸春秋 昭和47年6月号 p. 288

（5） 宇野善康著「沖縄農村の変容過程とイノベーション受容構造の研究」トヨタ財団 第2回 助成報告会資料 1978年2月

（6） 宇野善康著「革新的アイデアの開発普及過程に関する研究——コミュニケーション科学的視点からのアプローチ」博士論文 1968年

（7） つぎのような価値態度スケールによって測定された態度を類型化した結果，得られたものである．調査票の該当ページを転載しておく．

18. 次の意見のうち．あなたの御意見はどちらに近いですか．
二つの意見を読み上げますから，どちらかの意見に対して「確かにそうだ」あるいは「どちらかというとそうだ」と答えて下さい．
（注） 「確かにそうだ」の場合は 2. 「どちらかというとそうだ」の場合は 1. に○印をつける．
必ず右か左のどちらかの，1か2に○印をつけること，どちらでもないということのないように．

①	農作物は丹精こめて，汗を流して良質のものを作るべきだ	2 1	1 2	できる限り省力化して並質でも大量生産すべきだ
②	農作業はできる限り家族だけで独自にやりたい	2 1	1 2	農作業はできる限り，ゆい等で助けあってやりたい
③	作物栽培についての新しい技術等の講習に参加したい	2 1	1 2	先祖代々の方法を守って農業を営む方がよい
④	町村会議員選挙では部落推せんに従う	2 1	1 2	町村会議員選挙では自主投票する
⑤	長男が家督を相続するのが当然である	2 1	1 2	子供達はすべて均等相続するのが当然である
⑥	部落の常会では常に自分の意見をつらぬく	2 1	1 2	常会では部落の和が大切なので自分ひとり違った意見は言わない

⑦	御嶽(ウタキ)信仰は非合理的である	2	1	1 2	御嶽は神聖なものである
⑧	賦(ブ)へ出るのは部落民の義務であるから労働を提供すべきだ	2	1	1 2	賦(ブ)へ出るのは自分の都合のよい時だけでいい，あとは金銭で払えばよい
⑨	医者で治らない病気になった場合はユタに相談する	2	1	1 2	どんな病気でも，最後まで医者に頼る
⑩	部落のスピーカーはやかましくて迷惑である	2	1	1 2	部落のスピーカーは重宝で役に立つ
⑪	年中行事は金銭的負担が大きいから縮小すべきだ	2	1	1 2	年中行事の金銭的負担は多くても出すべきだ
⑫	村の決定には従うべきだ	2	1	1 2	村の決定が不合理なものなら従うべきでない
⑬	男児がいない場合女児を嫁に出して養子をとるべきだ	2	1	1 2	男児がいない場合今までの養子のとりかたにこだわらない
⑭	自分の土地は自分の物だから自分の都合で売ってもよい	2	1	1 2	自分の土地はどんなことがあっても売るべきでない
⑮	子供にも農業をつがせたい	2	1	1 2	子供は農業以外に就職させたい
⑯	資金とやり方しだいでは農業ももうかる	2	1	1 2	農業ではもうかる可能性が少ない

価値態度スケール（独自的―連帯的，進歩的―伝統的）

（8） 石川区では，海洋博参観者のための宿泊施設や食堂，駐車場などに土地収入を投入したが，すべてが裏切られ，只今は，ゴーストタウンの様相を呈してさえいる．

（本研究は，財団法人　トヨタ財団からの研究資金補助と建設省建設大学校中央訓練所スタフの協力を得て実現できたことを附記する．また，調査地（高良区，石川区，奥区）の方々の理解と温い協力によって，ある程度深くこの地方の方々の心に触れることができたことを衷心より感謝する次第である．）